

京都大学

生態学研究センター・ニュース

No. 67

京大生態学研究センター

〒520-2113 滋賀県大津市

上田上平野町字大塚509-3

Tel : (077) 549-8200 (代表)

Fax : (077) 549-8201

センター長 中西正己

Center for Ecological Research,

Kyoto University

Kamitanakami Hiranouchi,

Otsu, Shiga, 520-2113, Japan

Home page : <http://ecology.kyoto-u.ac.jp>

— 目 次 —

教官公募のお知らせ..... 1	公募実習の報告..... 6
京大生態学研究センター運営委員会 (第26回)	第2回屋久島フィールドワーク講座の報告..... 7
議事要旨..... 3	2000・01年度協力研究員追加リスト..... 7
京大生態学研究センター協議委員会 (第36回)	生態研セミナーのお知らせ..... 8
議事要旨..... 3	Information..... 8
パハカリフォルニア沖事故のその後の報告..... 3	COE研究員の移動..... 9
公募研究会のお知らせ..... 4	編集後記..... 9
公募研究会の報告..... 5	今後のスケジュール..... 10

教官公募のお知らせ

当センターでは、下記の要領で教官を募集致します。
つきましては、貴機関の関係者に周知を賜り、適任者の
応募・推薦についてご高配下さるよう、お願い申し上げ
ます。

1. 採用人員および対象分野

- 教授 1名 熱帯林における生態学的研究
教授 1名 野外操作実験による生態学的研究

2. 希望する内容

当センターは、1991年4月に設置された10年時限
(2001年3月まで)の全国共同利用施設で、時限以降さら
に、10年時限の新センターの設置を計画している。その
基本構想は後に記してあるが、その4つの中心プロジェ
クトのうち、今回の人事では、(c)に対応する教授1名
と(a)または(b)に対応する教授1名を求めている。

(c)に対応する教授は、熱帯林研究のプロジェクトリ
ーダーとなることが望まれる。(a)または(b)に関連し
た研究を行う教授は、野外操作実験(たとえば、センタ
ー内の林園・圃場や実験池を使用)によって、生態過程
のメカニズムを研究することが望まれる。

また、当センターの管理・運営にも積極的に貢献でき
る人を期待する。年齢・国籍は問わない。

3. 着任予定

2000年12月1日以後のできるだけ早い時期

4. 提出書類

自薦・他薦にかかわらず、以下の書類を提出してくだ
さい。

- (1) センター長宛の応募文(希望する分野を、熱帯林
と野外操作実験から選んで明記してください)
- (2) 履歴書 1部
- (3) 研究業績目録 1部(主要著作 5編に印を付して下
さい)
- (4) 主要著作(上記)の別刷等各 1部(これらに関す
る解説、総説等があれば添付すること)
- (5) 候補者のこれまで行なってきた研究の概要(1000
字程度)
- (6) これまで代表者・分担者として参加した研究プロ
ジェクトの概要(テーマ、プロジェクト全体とし
ての主要成果、プロジェクト全体への応募者自身
の寄与についてできるだけ簡潔にまとめること)
- (7) センターに來られた場合に、どのように次期セン
ターの中心プロジェクトを展開していくかの研究
構想(1000字程度にまとめる)
- (8) 応募者の研究内容について問い合わせることので
きる人物 2名の氏名と連絡先
- (9) 推薦書 1通(必ずしも必要ではない)

5. 公募締切

2000年10月12日（木）午後5時までに必着

6. 書類送付先

〒520-2113 大津市上田上平野町字大塚509-3

京都大学生態学研究センター長 中西正己

封筒の表に「教官応募書類」と朱書き、簡易書留によって郵送のこと。

7. 問合せ先

(1) 研究内容等について

生態学研究センター長 中西正己

Tel : 077-549-8210

Fax : 077-549-8201

ホームページ : <http://ecology.kyoto-u.ac.jp/indexj.html>

(2) 提出書類について

生態学研究センター専門職員

Tel : 077-549-8200

Fax : 077-549-8201

8. 生態学研究センターの専任教官

（2000年8月18日現在）

教授

中西正己、和田英太郎、浅野透、山村則男、清水勇、川端善一郎、大串隆之、永田俊

助教授

遊磨正秀、湯本貴和、占部城太郎、杉本敦子

助手

成田哲也、藤田昇

9. 新センターの構想

目的：生物多様性および生態系の機能解明と保全理論

全国共同利用施設京都大学生態学研究センターは2000年度で時限となるが、同名で10年時限の新センターを設立することを計画している。

近年、自然生態系への人為的攪乱が地球規模で起き、今後も持続的に進行していくことは避けがたい。その結果、生命史上いまだかつてなかった速度で多くの生物種が絶滅し、生物多様性が急速に失われつつある。また、エネルギーの流れと物質循環に異常が生じ、自然のバランスが壊れて本来の生態系の機能が劣化しつつある。このような問題を解決するため、その基礎研究をおこなう生態学への社会的要請は大きい。本研究センターの目的は、生物多様性の創出・維持・喪失のメカニズムや、物質循環を基本とする生態系の構造を解明すること、さらに、人為的攪乱の影響を分析し、生物多様性と生態系を保全するための一般理論を構築することである。このような研究は、生物多様性を保全する意義そのものを明確にし、人類の活動と自然生態系の調和をはかりながら、持続的な人間と自然の共生を達成するために不可欠なものである。

のである。以上の目的を達成するため、国内だけでなくアジア・西太平洋地域で以下のプロジェクトを中心に研究を展開する。

中心プロジェクト：

(a) 生物間相互作用が生み出す生物多様性：その機構・機能・保全

（捕食、被食防衛、競争、相利共生、進化的アプローチ、ボトムアップ効果、資源動態、栄養段階動態、間接効果、食物網）

(b) 水域生態系の構造と機能およびその保全

（多様性、栄養塩、光、水温躍層、遺伝子伝播、プランクトン群集、水生生物、琵琶湖、実験池、アクアトロン）

(c) 熱帯林における生物多様性と生態系機能

（熱帯林、東南アジア、生物多様性、生態系機能、攪乱、一斉開花、共生、バイオリサイクル、ターマイトロン、安定同位体）

(d) 分子解析生態学

（遺伝子分析、安定同位体分析、環境適応、遺伝子発現調節、環境ストレス、視覚適応、視物質遺伝子、時計遺伝子、代謝変動、ズートロン）

新センターの特色：

新研究センターでは、従来の野外研究を中心とする生態学的手法に加えて次のような特色を出そうとするものである。まず、京都大学で設立をめざしているフィールドステーションおよび、大学共同研究機関（国立研究所）として設立される予定の総合地球環境学研究所（仮称）などと連携して、野外操作実験を有効かつ迅速に行えるような研究体制を作る。一方、分子生物学・微量化学物質測定などの最新技術を駆使して、因果関係を確実に実証できる実験研究体制を作る。このため、シンバイオトロン施設を充実する。すなわち、野外で検出したパターンを理論化し記述モデルをつくって、それを実験で検証する。さらに、予測モデルをつくり、それを野外で検証するという、従来の生態学で不十分であった科学的プロセスを確立する。

また、研究機関ネットワークを強化して、国内外の人材の交流も含めて研究交流がスムーズにいく体制を作る。質の高い研究成果をあげること、および、社会的貢献をすることが、研究センターに課せられる最も重要な使命であるが、京都大学理学研究科などに協力し、大学院生の教育によって後継者の養成にも力を注ぐ。

京都大学生態学研究センター
運営委員会（第二十六回）議事要旨

日 時：2000年7月18日（火）10時05分～12時10分
場 所：生態学研究センター第二講義室
出席者：運営委員22名、幹事1名

- ・議事に先立ち、中西センター長（5月1日就任）の挨拶があり、副センター長として山村教授を指名し、了承を得た。
- ・永田（4月1日就任）新委員の紹介、今回から幹事となった倉本理学部等事務長（代理畑専門員）の紹介があった。

報告事項

1. 安部琢哉教授、東正彦教授、中野繁助教授の遭難について報告があった。
2. 平成13年度歳出概算要求事項等について説明がなされた。
3. 平成12年度非常勤研究員（COE）の選考経過等について説明があり、4月1日付で継続2名、4月16日付で新規1名を採用。
4. 平成12年度研修員1名、日本学術振興会特別研究員4名を受け入れ。

議題

1. 教官人事：安部教授、東教授の補充人事選考を行うために運営委員会に人事基準委員会を設置することが承認され、委員5名を選出した。この人事基準委員会では、教授2名の選考基準案を一括作成することとした。
2. 専門（常設）委員会委員の選出：欠員となっている3つの委員会の委員5名、野外活動安全委員会の設置及び委員2名を承認した。これに伴い、申し合わせの庶務委員会を削り、野外活動安全委員会を加えることを承認した。広報委員会の設置についての提案があり、今後も引き続き審議することとした。

（文責 清水勇）

京都大学生態学研究センター
協議員会（第三十六回）議事要旨

日 時：2000年7月18日（火）15時～15時20分
場 所：京大会館215号室
出席者：協議員8名、幹事1名

- ・議事に先立ち、中西センター長（5月1日就任）の挨拶があり、副センター長として山村教授を指名し、了承を得た。

報告事項

1. 安部琢哉教授、東正彦教授、中野繁助教授の遭難についての経過報告があった。
2. 平成12年度研修員1名、日本学術振興会特別研究員追加1名を受け入れ。

議題

1. 教官人事：安部教授、東教授の補充人事選考を行うために、運営委員会に人事基準委員会を設置したことが報告された。

（文責 清水勇）

バハカリフォルニア沖事故のその後の報告

安部琢哉教授、東正彦教授、中野繁助教授の痛ましい事故から、はや4ヶ月が過ぎました。去る7月30日には中野繁助教授の故郷である岐阜県古城郡神岡町の円城寺で中野氏の告別式がとり行われ大勢の人が参列しました。センターでは来年3月18日（日）に、3人の方々を偲ぶ会を予定しています。詳細は決まり次第センターニュースやホームページでお知らせします。3人の方々のご冥福を心よりお祈りいたします。

公募研究会のお知らせ

海洋沿岸域の環境変動とクラゲ類の大量発生に関する研究集会

Environmental Changes in Marine Coastal Waters and Jellyfish Blooms

代表者：上 真一（広島大学生物生産学部）

開催目的：近年、世界各地の沿岸海洋域においてクラゲ類（クシクラゲ類も含む）が大量発生し、漁獲量の減少、発電所の取水口の閉塞、海水浴場の閉鎖などの様々な社会的被害をもたらしている。このようなクラゲ類の発生をもたらした原因は沿岸域の富栄養化などの環境変動ではないかと疑われているが、それらの因果関係については不明のままである。本研究集会では、海外や本邦の沿岸域のクラゲ類の大量発生に関する情報を交換すると共に、大量発生を引き起こす要因やクラゲ類の防除方法を検討し、将来の沿岸海洋生態系の管理について討論する。

主催：研究集会実行委員会

共催：水圏生態系の健康と管理学会（The Aquatic Ecosystem Health and Management Society, AEHMS）、日本プランクトン学会、マリンバイオ学会、京都大学生態学研究センター

日時：2000年10月29日（日）10:00-17:30

場所：琵琶湖研究所

〒520-0806 滋賀県大津市打出浜1-10

TEL 077-526-4800、FAX 077-526-4803

プログラム（案）：

午前（10:00-12:00）

開催趣旨説明 上 真一（広島大学生物生産学部）
招待講演 2 題

- 1) Mohiuddin Munawar (Great Lakes Laboratory for Fisheries & Aquatic Sciences, Fisheries & Ocean Canada, AEHMS会長)
Ecosystem health and management: activities of AEHMS and AEHM publications (tentative)
- 2) Mary N. Arai (Pacific Biological Station, Canada)
Jellyfish blooms and eutrophication: A review

昼食（12:00-13:20）

午後（13:20-17:00）

- 一般講演 9 題（質疑応答の時間も含めて各20分）
- 1) 安田 徹（福井県庁）
巨大エチゼンクラゲの異常出現
 - 2) 久保田 信（京都大学瀬戸臨海実験所）
クラゲ類大量発生メカニズムをポリブに求める（仮題）

3) 上野俊士朗（水産大学校）

クラゲ類大量発生メカニズムは生活史の解明から - アンドンクラゲの例

4) 粕谷智行（港湾技研）

クシクラゲ類の増加は本当に悪か？ - 東京湾に出現するカブトクラゲを例として

5) 杉崎宏哉（東北水研）

ベーリング海におけるクラゲ類の増加と漁獲量の低下（仮題）

休憩（15:00-15:20）

6) 三宅裕志（海洋科学技術センター）

クラゲの成長速度は驚異的 - 鹿児島湾におけるミズクラゲの成長

7) 石井晴人（東京水産大学）

ミズクラゲの摂食生態 - 餌を巡る魚類との競合

8) 大内一郎（東電環境エンジニアリング）

東京湾におけるミズクラゲ幼生の分布特性と成体の現存量推定について

9) 長沼 毅（広島大学生物生産学部）

クラゲ類防除のためのエコテクノロジー

総合討論（17:00-17:30）

懇親会（近くの居酒屋などで）

ポスター発表 3 題

1) 豊川雅哉・中田 薫（中央水産研究所）

黒潮周辺海域におけるクラゲ類の出現の季節変動

2) 喜多村稔（東京水産大学）

シミコクラゲの摂餌生態

3) 渡邊朋子（東京水産大学）

ポリブ期のミズクラゲの生態

問い合わせ先：

上 真一

〒739-8528 東広島市鏡山 1 丁目4-4

広島大学生物生産学部

電話：0824-24-7940、ファックス：0824-22-7059

Eメール：suye@hiroshima-u.ac.jp

あるいは、

長沼 毅

住所同上

電話：0824-24-7986、ファックス：0824-22-7059

Eメール：takn@hiroshima-u.ac.jp

公募研究会の報告

第7回バイオリージョンGIS研究会
生態学におけるGISの応用 - 現状と課題 -

田中和博（京都府立大学農学部森林科学科）

京都大学生態学研究センターの2000年度公募研究会として標記の研究会が、地理情報システム（GIS）学会バイオリージョン分科会の主催により、2000年6月13日（火）の10時から18時まで、京都市国際交流会館（京都市左京区）で開催された。総出席者数は138名であった。

バイオリージョン（bioregion）とは、気候、地形、流域、土壌、野生生物など、その地域に固有な独特の自然によって決まってくる地域生命圏のことである。本研究会はGISを用いた地域生命圏の研究について情報を交換しているが、第7回研究会では、生態学におけるGISの応用をテーマとして、各領域から研究の現状を報告していただいたとともに、今後の課題について議論した。

午前の部では、この分野の草分け的な研究者であるカール・スタイニッツ（Carl Steinitz）博士（ハーバード大学）による特別記念講演が行われた。なお、これに先立ち、矢野桂司氏（立命館大学）から同博士の紹介があった。スタイニッツ博士の講演は英語で行われ、演題は、Biodiversity and landscape planning using GIS（地理情報システムによる生物多様性と景観プランニング）であった。逐語通訳は吉田剛司氏（京都府立大学）が務めた。スタイニッツ博士の講演は、1990年代にアメリカのカリフォルニア州にある海兵隊基地キャンプ・ペンドルトンを対象地域にして実施された研究プロジェクトの概要を紹介するものであった。なお、この研究成果は2冊の報告書（1996, 1997）にまとめられており、その日本語訳が矢野氏・中谷氏の共訳で研究会の演題と同名の書名で地人書房から1999年8月に出版されている。

スタイニッツ博士は講演の中で、景観プランニングの作成に際して最も重要なことはフレームワークを構築することであると強調された。それは、データを情報に変え、そして文化的な知識に変えていく過程でもあり、景観プランニングの考え方と手順を示すものであった。また、同博士の熱意のこもった迫力あるご講演と気さくなお人柄は会場に集まった多くの人を魅了した。

午後からは以下の通り会員4名による話題提供と質疑応答が行われた。

13：30～ 原 慶太郎氏（東京情報大学）・池上佳志氏（北海道大学）「ランドスケープ・エコロジーとGIS」

池上氏は、景観生態学の最近の動向を概括し、そのなかでGISがどのように応用されてきたかを、とくに景観構造や機能の解析ならびに地域環境計画への応用などに焦点をあてて報告された。具体例として、瀬戸内海の小島において、地形、地質、土壌、植生の4つの景観因子のオーバーレイによって抽出されたエコトープ（ecotope）に基づいたゾーニング結果が示され、各植生型に

おける自然立地および人間活動との関連が報告された。

14：15～ 鷹尾 元氏・工藤琢磨氏・尾崎研一氏（森林総合研究所北海道支所）「石狩平野のオオタカ - 森林総合研究所北海道支所におけるGISデータを用いた生態系の総合解析とデータの相互利用の試み -」

鷹尾氏は、アンブレラ種であるオオタカを指標とした生物多様性モニタリング手法の開発プロジェクトについてご報告された。オオタカは森林性の猛禽であるが、石狩平野では、農地の保護のための防風林を営巣・捕食・移動に利用しており、とくに、林縁を多く使っていることがラジオテレメトリー調査等から示唆された。

15：15～ 田村正行氏（国立環境研究所）・樋口広芳氏（東京大学）「東アジアにおける渡り鳥の移動経路と生息環境の衛星観測」

田村氏は、東アジア地域に棲む大型の湿地性渡り鳥の採食や繁殖の場である湿地およびその周辺環境の実態を把握することが急務であると報告された。タンチョウとコウノトリに軽量の発信器をつけ、NOAA衛星によるARGOS 無線追跡システムを使って抽出された移動経路と、繁殖地、中継地、越冬地が示された。

16：00～ 佐久間陽之氏・野堀嘉裕氏・野呂瀬幸政氏・高橋教夫氏（山形大学）「GISを用いたブナ生育地の地形解析 - 東北地方における経緯度が異なる6ヶ所での事例 -」

最終氷期以後の地球温暖化に伴いわが国のブナ林の分布は北上過程にあるといわれているが、野堀氏のご報告は、東北地方の各地に分布するブナについて経緯度の違いと生育地の地形を解析したものであった。経緯度や日本海からの距離ならびに標高・傾斜角・傾斜方向などとの関連性を解析した結果、ブナ林分布の現在的特徴が抽出され、植生分布パターンのシミュレーションの可能性が示唆された。

総合討論は高橋正義氏（森林総合研究所北海道支所）の司会の下に行われた。

最後に分科会副代表の野堀嘉裕氏（山形大学）がまとめをして閉会の挨拶とした。

なお、当日の配付資料等は、分科会のホームページ：<http://af2.kpu.ac.jp/BioGIS.html>に掲載してある。

[問い合わせ先]

地理情報システム学会 バイオリージョン分科会

〒606-8522 京都市左京区下鴨半木町1-5

京都府立大学 農学部 森林計画学講座内

TEL&FAX：075-703-5629

E-mail：tanakazu@kpu.ac.jp

公募実習の報告

河川生態系の環境構造と生物群集に関する基礎実習

加藤元海（京都大学生態学研究センター・D3）

本年度は、7月20日から28日にかけての9日間、長野県木曽福島町にある京都大学理学部木曽生物学研究所において公募実習が行なわれた。実習は「河川生態系の環境構造と生物群集に関する基礎実習」が課題として行なわれた。講師は、中西正己・山村則男・川端善一郎・宮坂仁・加藤元海（生態学研究センター）、野崎健太郎（滋賀県立大）、三橋弘宗（兵庫県人と自然の博物館）が担当し、実習生は全国各地の大学から8名が参加した。

今回の実習で対象となった生物は、藻類、水生昆虫、魚類と河川における食物連鎖網を網羅している。実習の前半では、これらの生物を、河川の特徴の異なる木曽川本流、黒川（木曽川の支流）、アカシオ沢（黒川に流入する沢）で採取し、同定した。実習後半は、前半での見識をもとに自由に研究課題を設定し、各自取り組んだ。行なわれた研究課題は：

「緑藻 *Stigeoclonium* は河川のどのような石に付着するか」大久保智史（京大農M1）

「魚の好きな淵の特徴」古川未来（三重大生物資源4年）

「ミズダニの存在に対する石間の違い」松本典子（大阪府大総合科学3年）

「生物による基礎代謝量の違い」見上勉（滋賀県立大環境科学M1）

「異なる光環境におかれた付着藻の生産」田中真（熊本大理3年）

「淵と瀬の河辺林と河に溜る落葉の関係 ～葉の行方～」稲田陽介（千葉大園芸3年）

「付着藻の有無による水生昆虫相の回復の差」加藤康充（滋賀県立大環境科学4年）

「ミカドガガンボの幼虫は分解者として優れているか」小田さつき（近畿大農4年）

本年の自由研究は、例年に見られない生物も取り扱われた。小さく目に触れにくいミズダニや、灰色でイモムシに似ており、かつ、大型でブヨブヨしているため敬遠されがちなミカドガガンボがその例である。また、水中の生物ではなく、川を流れる落葉に注目した自由研究もあった。水中の溶存酸素濃度を決定するウインクラ法を用いて、藻類の一次生産や水生生物の基礎代謝を調べる研究が行なわれたことも、本年の実習の特徴であろう。

我々が行なう実習は、河川生態学の基本のみで細かいことまで講義しないようにし、実習生それぞれが「河川」というものを体験することに重きを置いている。その一例としては、淵に生息する生物を調べるにあたって川底の石を採取するわけだが、水深が胸元までの一見流れの

緩いところでさえ、体が流され思うように採取できないことを知り、河川の偉大さや恐ろしさを実感したのではないと思う。また、水生昆虫やサンショウウオ、魚など川で取れたあらゆるものを食べたりもした。このように、実習生はそれぞれの体験を通しておもしろい現象を自分で発見し、さらにそれを明らかにする「研究」の醍醐味的一端を味わえたのではないと思われる。また、ちょうど木曽まつりの時期と一致し、木曽の町の花火大会を見て、木曽おどりを「実習」することもできた。夜の空き時間には、一緒に酒を飲みながら、時には学問の話、時にはアホな話をしながら過ごした。特に学部学生は「教官は三人ともおもしろい人やった」と言っていたように、普段知られざる大学教授の「生態」をかいま見ることができたことが印象的だったようだ。

自由研究の面では、みんな最後までまじめに取り組み、最終日には全員が徹夜するというきついものであったが、一方では楽しい時間も存分にあったように思われる。最後に、講師を含めた参加者全員が事故やケガもなく、また河川のみならずその他さまざまなことも常に楽しく体験できたのは、この真夏の時期に冬布団をかぶって寝るほど涼しい木曽の町と、常においしいご飯を作ってくれた山田さんのおかげであろう。感謝。

感想文

「2000年木曽実習を通して」

今年は、木曽実習生が全国から公募ということで東は千葉、西は熊本の大学からまったく専攻の異なる8人が集まって実習をおくることができました。木曽実習の良いところは、講師陣も学生もまさに寝食をともにして研究ができたことだと思います。また、小規模の実習ながらフィールドに朝早くくり出し、各自の研究テーマの方向性を自由に模索してゆく毎日でした。また、全員が寸暇を惜しんで、木曽おどりに参加したり、川で泳いだりとエネルギーに実習を楽しめたと思います。今回の実習では、事前に案内の通知が届いたのですが、洗濯ができるかなど実習場に関する情報をもう少し詳しくいただけると来年からの実習生に役に立つと思います。おわりに、我々が残した研究の成果をもとに、来年からの実習生が、新しい発想で未知への探求に挑戦し続けていくことを期待します。

実習生一同

第2回屋久島フィールドワーク講座の報告

湯本貴和（京都大学生態学研究センター）

8月2日から9日にかけて、上屋久町主催、屋久町、（財）屋久島環境文化財団、京都大学生態学研究センター、京都大学霊長類研究所共催で、第2回屋久島フィールドワーク講座が開催された。受講生は18名で、加えて講師5名、チューター1名の参加であった。「ひとと自然の関わり」、「鳥の生活」、「ヤクシマザルを追う」、「植物と自然」の4つのテーマを屋久島の世界遺産登録地域において、前半3日、後半3日の2クールで平行に行い、それぞれの受講者は2テーマについて実習を履修した。

各クールの最終日には4つのチームそれぞれの発表が行われた。また、夜20時から、各講師の講義が1時間半にわたって行われたが、この部分は一般にも公開され、延べ96名の参加があった。毎朝7時から朝食、8時にフィールドワークへ出発、17時ごろに帰ってきて入浴、データ整理、19時から夕食、20時から講義、21時半から毎夜24時近くまでデータ整理、さらに鳥チームは早朝4時半に出発の日もあったため、受講者、講師ともかなりハードなスケジュールであったが、病気や事故もなく、無事終了することができた。受講者の募集から、宿舎の管理など、細々と面倒をみていただいた上屋久町の環境政策課のみなさんに厚くお礼を申し上げる。なお、この講座は来年度も予定され、次回は大学生に加えて、地元の屋久島高校の生徒を受講者に迎える方向で検討中である。

日程

- 8月2日 集合、開講式、オリエンテーション
 8月3日～5日 実習（第1クール）講義
 8月6日 屋久島学講座（島内一周といくつかの施設の見学）
 8月7日～9日 実習（第2クール）講義（8日まで）
 8月9日 閉講式、反省会
 8月10日 解散

講師と講義名

- 8月2日 湯本貴和（京都大学）「世界遺産の島・屋久島：植物の分布と固有種」
 8月3日 川窪伸光（岐阜大学）「自然観察入門：植物と友だちになる方法」
 8月4日 野間直彦（滋賀県立大学）「木の実と動物達の絆：種子散布の生態」

- 8月5日 丸橋珠樹（武蔵大学）「森の果実の多様性を創った霊長類」
 8月7日 湯本貴和（京都大学）「華麗なる花の世界：動物を惹き付ける工夫」
 8月8日 澤田昌人（京都精華大学）「アフリカの森に生きる：コンゴの森のカミガミ」

実習コースと講師

- 「ひとと自然の関わり」澤田昌人（京都精華大学）
 「鳥の生活」野間直彦（滋賀県立大学）
 「ヤクシマザルを追う」丸橋珠樹（武蔵大学）
 「植物と自然」湯本貴和（京都大学）川窪伸光（岐阜大学）今村彰生（京都大学・チューター）

受講者

- 松本典子（大阪府立大学総合科学部自然環境科学科三回生）
 中村剛（琉球大学理学部海洋自然科学科生物系三年）
 森長真一（富山大学理学部生物学科三年）
 南波和美（滋賀県立大学環境科学部環境生態学科三回生）
 久保由起子（西南学院大学法学部国際関係法学科三年）
 谷津潤（東京都立大学理学部生物学科三年）
 櫛木春理（京都大学理学部生物科学系三回生）
 古川祐美（鹿児島大学理学部地球環境科学環境コース三年）
 柴田拓哉（法政大学社会学部社会政策科学科四年）
 森洋佑（山形大学農学部生物環境学科三年）
 松原圭（琉球大学理学部海洋自然科学科生物系三年）
 大木庸子（山形大学農学部生物環境学科三年）
 井上健彦（滋賀県立大学環境科学部環境生態学科三回生）
 長井美緒（鳥取大学農学部農林総合科学コース三回生）
 齋藤有香（大阪市立大学理学部生物学科二回生）
 久芳文香（筑波大学第二群生物資源学類三年次）
 金岡雅文（信州大学人文学部三年比較哲学専攻）
 春友彦（法政大学社会学部社会政策科学科四年）

2000年度・2001年度京都大学生態学研究センター協力研究員（Guest Scientist）追加リスト

氏 名	所 属	研 究 課 題
中越信和	広島大学総合科学部	東アジアの温帯域における景観生態学的研究

生態研セミナーのお知らせ

スペシャル

9月1日(金)

Rhett Daniel Harison (Center for Ecological Research, Kyoto University)

「半着生イチジク群集内でのニッチ分割 熱帯の生物多様性におけるパラドクス？」

"Niche differentiation in a community of hemi-epiphytic figs (*Ficus* spp.) A paradox for tropical biodiversity?"

市栄智明(京都大学生態学研究センター)

「フタバガキ科巨大高木の斉開花とその後の成長に対する資源投資」

Tomoaki Ichie (Center for Ecological Research, Kyoto University)

"Resource allocation for general flowering and following vegetative growth of dipterocarp species"

第127回

9月22日(金)

寺島一郎(大阪大学大学院理学研究科)

「葉の光合成の生態生理学」

Ichiro Terashima (Department of Biology, Graduate School of Science, Osaka University)

"Ecophysiology of leaf photosynthesis"

谷内茂雄(京都大学生態学研究センター)

「価値観のモデルが生態系サービス(環境価値)の評価にはたす役割」

Shigeo Yachi (Center for Ecological Research, Kyoto University)

"The importance of modelling the sense of values in understanding the value of ecosystem services"

スペシャル

10月10日(火) 15:30~17:00

Martin Nowak (Ecology and Evolutionary Biology, Princeton University)

"Evolution of language"

第128回

10月20日(金)

櫻井克年(高知大学農学部)

タイトル未定

土井 敦(京都大学生態学研究センター)

「南ボルネオでの淡水魚類による三日月湖の利用形態」

Atsushi Doi (Center for Ecological Research, Kyoto University)

"Fish community in an oxbow lake in South Borneo"

いずれも14:00~17:00(10月10日のスペシャルを除く)

京都大学生態学研究センター(瀬田)セミナー室にて行います。

関心のある全ての方の来聴を歓迎いたします。

information

第23回極域生物シンポジウム

日時:平成12年12月7日(木)・8日(金)

場所:国立極地研究所 講堂

〒173-8515 板橋区加賀1-9-10

JR 埼京線「板橋」駅より徒歩15分、

または都営地下鉄三田線「板橋区役所前」駅より徒歩10分(東板橋体育館隣)

主催:国立極地研究所

概要:国立極地研究所では南極および北極や北方域で得られた研究成果について、発表、討論を行うことを目的として毎年シンポジウムを開催しています。

現在、南極の生物研究において、第V期5ヶ年計画(第38次~第42次)が進行しています。この5ヶ年計画では、海氷域におけるペンギン研究(SIPENS)が中心課題の一つとなっており、同時に海氷縁辺域の基礎生産に焦点を当てた観測が行われております。また、

陸上生物研究においては、環境変化に伴う極域生態系の応答性に関する研究が国内外で実施されており、興味深い事実が明らかになりつつあります。

今回のシンポジウムでは、現在、極地で実施されている研究計画の成果を中心に、極域の生物に関する研究の発表を広く募集いたしますのでふるって御参加のほど、お願い申し上げます。

詳細は下記にお問い合わせください。

〒173-8515 板橋区加賀1-9-10

国立極地研究所 生物シンポジウム事務局

TEL:03-3962-4569(事務局直通)

FAX:03-3962-5743

E-mail:iwao@nipr.ac.jp

http://www.isc.nipr.ac.jp/penguin/

コンピーナー:福地光男 TEL:03-3962-6031

工藤 栄 TEL:03-3962-5720

北海道大学低温科学研究所・助教授公募

公募人員：寒冷圏総合科学部門 助教授 1 名

研究内容：陸上動物群集における生物多様性の創出・維持機構を生態学的観点から研究する人を希望します。大学院は北海道大学大学院地球環境科学研究科・生態環境科学専攻を担当して頂く予定です。当研究所の生態学関係のスタッフとしては、動物生態学分野に戸田正憲（教授）と大舘智志（助手）が、植物生態学分野に原登志彦（教授）、隅田明洋（助教授）と鈴木準一郎（助手）が在籍しています。詳細は低温研ホームページの組織、研究者一覧を参照して下さい。
(<http://www.lowtem.hokudai.ac.jp/home.html>)

着任時期：平成13年4月1日の予定

提出書類：

- 1) 履歴書（連絡先、大学入学以降の学歴、研究・教育歴、学位、受賞歴など）
- 2) 研究業績目録（査読制度のある学術誌に発表した原著論文、総説、著書、その他などに分ける）
- 3) 主要論文別刷りあるいはコピー10編以内（研究業績目録に印を付ける）

- 4) これまでの研究概要（2,000字程度）
- 5) 着任後の研究展望と抱負（2,000字程度）
- 6) 応募者についての意見を聞ける人2名の氏名、所属、連絡先電話番号

公募締切：平成12年10月2日（月）必着

書類提出先：

〒060-0819 札幌市北区北19条西8丁目
北海道大学低温科学研究所
所長 本堂武夫

封筒の表に「寒冷圏総合科学部門助教授応募書類」と朱書きし、書留でお送り下さい。

問い合わせ先：

北海道大学低温科学研究所
寒冷圏総合科学部門 教授 戸田正憲
TEL：011-706-6887，FAX：011-706-7142

COE研究員の移動

2000年度のCOE外国人研究員は、Liubov Vasilievna Soukhanova氏（ロシア科学アカデミーシベリア陸水学研究所）と但 建国（ダン・ジャンゴ）氏（ドイツマールボークマックスプラント研究所）がそれぞれ2001年3月31日、2001年6月30日までの予定でセンターに滞在中です。

編集後記

- ・センター敷地内の工事も終わり、キャンパスらしくなりました。
- ・皆さんからの記事やご意見をお待ちしています。

（杉本敦子）

京都大学

生態学研究センター・ニュースの問い合わせ先

京都大学生態学研究センター・ニュース編集係

〒520-2113 滋賀県大津市上田上平野町字大塚509-3

Tel (077) 549-8200

Fax (077) 549-8201

e-mail cernews@ecology.kyoto-u.ac.jp

今後のスケジュール

センターの行事

センターあるいは京大環境フォーラム、DIWPA関連の研究会

関連分野の研究会・シンポジウム

2000年

10月20日 センター・ニュースNo. 68

12月20日 センター・ニュースNo. 69

2001年

2月20日 センター・ニュースNo. 70

8月20日～24日 Biodiversity Conference (Nobosibirsk)
8月20日～24日 8th Paleolimnology Conference (Kingston, Ontario)
8月23日～27日 Vereshagin Conference (Irkutsk)

9月14日～17日 日本陸水学会第65回大会 (福岡大学)

10月24日～27日 4th International Symposium on Sediment Quality Assessment (大津)

11月24日 個体群生態学会研究会 (滋賀県立大学)

12月7日～8日 第23回極域生物シンポジウム (東京、国立極地研究所)

12月10日～16日 西暦2000年酸性雨国際学会 (つくば)

10月29日 公募研究会「海洋沿岸域の環境変動とクラゲ類の大量発生に関する研究集会」(大津市・琵琶湖研究所)

11月14日～18日 国際シンポジウム 西太平洋アジア生物多様性ワークショップ「国際生物多様性観測年のための方法論の確立」(大津市、瀬田)

12月 公募研究会「林床から森林動態を考える Part III」

12月6日～7日 新プロ「生物多様性」全体会議 (大津市、瀬田)

12月8日～11日 国際シンポジウム「地球環境攪乱下における空間構造と食物網ダイナミックス」(京都市、京大会館)